



鹿児島方言のアクセント変化 : 複合法則の崩壊 (西光義弘教授還暦記念号)

窪菌, 晴夫

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:111-123

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001528>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001528>



鹿児島方言のアクセント変化 ——複合法則の崩壊——

窪菌 晴夫

神戸大学人文学研究科

1. 序

先行研究において鹿児島方言のアクセント変化メカニズムが議論されている（窪菌 2006a/b, Kubozono 2007）。そこでは、中高年層と若年層のアクセントに少なからず違いが見られ、前者から後者へのアクセント型の変化に東京方言（標準語）の顕著な影響が見られるという主張が展開されている。本稿ではこの主張を検証すべく行った方言調査の結果を報告し、「箸子」や「飴男」のような新造語（人名）の発音が伝統的な複合法則に従わず、この法則が東京方言の干渉で失われつつあることを指摘する。

次節ではまず鹿児島方言のアクセント体系を概観し、第3節では上記の先行研究の報告を紹介する。続く第4節では今回の調査について方法と着眼点を述べ、第5節ではその調査結果を報告、分析する。最後に本稿の結論と今後の課題を述べたい（第6節）。

2. 鹿児島方言の韻律特徴

鹿児島方言は、語彙の長さに関わらず2つのアクセント型しか許容しない「^{にけい}二型アクセント体系」を有している（平山 1951, 木部 2000）。具体的には、語末から二つ目の音節が高く発音される型（A型）と語末音節が高くなる型（B型）の二型である。名詞・動詞・形容詞といった品詞の違いに関わらず、また和語・漢語・外来語という語種の違いにも、単純語・複合語という形態構造の違いにも関わらず、A型とB型の二種類しか容認しない。「楓」と「紅葉」は伝統的にA型、B型にそれぞれ分類される（以下、高く発音される部分に―を付す）。

(1) A型：かえで

B型：もみじ

二型アクセントとならんで鹿児島方言のアクセントを特徴づけるのが、音節主体の体系という点である。語末から音節を数え、また音節を単位として高い音調（ピッチ）を付与する。距離を数える単位、音調の付与単位がいずれもモーラ（＝拍）ではなく音節である。鹿児島方言が「シラビーム方言」（音節方言）に分類されるのは、このためである（柴田 1962）。A型の単語「鉛筆」を例にとると、丁寧な発音とくだけた発音が次のような音調を示す（ドット(.)は音節境界を表す）。

(2) えん.び.つ～えん.びっ

鹿児島方言のもう一つの特徴は、複合法則（平山の法則）と呼ばれる複合語音韻規則にある（平山 1951、上野 1997、早田 1999）。これは「複合語句は初頭要素のアクセント型を継承する」という法則で、(3)に示したように、初頭要素がA型であれば複合語句全体が

A型アクセントとなり、初頭要素がB型であれば複合語句全体がB型アクセントとなる。たとえば「赤」はA型で発音されるため、「赤ペン」「赤信号」などの複合語も、「赤が」「赤信号が」のような句表現も末尾から2音節目が高く発音される。後部要素によって複合語のアクセント型が決まる東京方言とは対照的に、最初の要素のアクセント型さえわかれば、どれだけ長い語句であっても（同じ文節内である限り）、全体のアクセント型を予測することができるのである。長崎方言の二型アクセント（坂口 2001）とは異なり、一定の長さ以上になると2つの型が中和されるということもない。

- (3) あ.か (A型) : あ.か.ペン、あ.か.えん.び.つ～あ.か.えん.び.つ、あ.か.ペン.が、
あ.か.えん.び.つ.か.ら
あ.お (B型) : あ.お.ペン、あ.お.えん.び.つ～あ.お.えん.び.つ、あ.お.ペン.が、
あ.お.えん.び.つ.か.ら

東京方言などと同じように、母音の無声化がアクセントに影響を及ぼすこともある。たとえば「行く」という動詞はA型アクセントであり、その活用形もまたA型となることが予想される。母音の無声化がなければ「行きます」という発音が期待されるところであるが、通常発音では「行きます」と発音される。つまり、「す」の無声化によって「ます」が1音節(mas)のように振る舞うのである。これはB型の語彙でも同じであり、「見る」の活用形「見ます」は「す」ではなく「ます」が高い音調を受ける。無声化母音が高音調、低音調のいずれの部分に現れても、その音節は単独では独立した音節として計算されないのである。

- (4) 行.く—行.き.ます (～行.き.ま.す)
見.る—見.ま.す (*見.ま.す)

3. 先行研究

鹿児島方言のアクセント変化メカニズムを探った先行研究として窪菌 (2006a/b), Kubozono (2007)を紹介する。まず、鹿児島方言には下降調 (A型) と非下降型 (B型) のアクセント型が存在し、東京方言にも下降調 (起伏式) と非下降式 (平板式) の2種類のアクセント型が存在する。この対応関係を示したのが表1である。また、複合名詞についても同様に4つの組み合わせが存在する (表2)。

表1 基本語彙における東京と鹿児島のアクセント対応

東京方言	鹿児島方言
a. 起伏式 (食 ^へ べもの)	A型 (食 ^へ べもの)
b. 平板式 (と ^も だち)	A型 (と ^も だち)
c. 起伏式 (飲 ^み もの)	B型 (飲 ^み もの)
d. 平板式 (ね ^ず み)	B型 (ね ^ず み)

表2 複合語における東京方言と鹿児島方言のアクセント対応

東京方言	鹿児島方言
a. 起伏式 (あかしんごう)	A型 (あかしんごう)
b. 平板式 (らくだいろ)	A型 (らくだいろ)
c. 起伏式 (あおしんごう)	B型 (あおしんごう)
d. 平板式 (ねずみいろ)	B型 (ねずみいろ)

窪園 (2006a)は基本語彙と複合名詞の両方について表1, 2に示した4種類の組み合わせを配慮し、それらができるだけバランスを保つような調査語彙リストを用いて、高年層(60歳以上)、中年層(40~55歳)、若年層(12~14歳)の3世代について現地調査を行った。調査地点は薩摩川内市(旧川内市)高江町である。この調査の結果をまとめたのが表3である。

表3 年齢層別、語句タイプ別の誤答率(%)

年齢層 \ 語句タイプ	基本名詞	複合名詞	句表現
高年層	3	6	1
中年層	7	8	1
若年層	21	25	3

この表からまず、中年層と若年層の間に大きな違いがあることがわかる。つまり、中年層と高年層の成績に大差はないが、若年層では誤答率が高い。さらに、世代を問わず句表現アクセントの正答率が高いことも明白である。若年層では、基本名詞や複合名詞の20%以上に誤答が生じているが、句表現(名詞+が)となるとほとんど誤答が生じない。「が」が付いた時に高い部分を自動的に右側に動かすという操作は正しくできており、たとえば「ブラジル」という語を「ブラジル」と発音する話者は「ブラジルが」と、「ブラジル」と発音する話者は「ブラジルが」と、複合法則通りに発音していた。

窪園 (2006a)はデータをさらに詳細に検討した結果、いずれの年齢層でも「誤答」と呼ばれるものはA型とB型の混同が大半であると報告している。たとえば若年層には「ブラジル」を従来のA型(ブラジル)で発音しない話者が少なからず見られるが、誤答の正体はB型(ブラジル)である。「ブラジル」や「ブラジル」のような鹿児島方言の体系で許されない型はほとんど観察されない。これは基本名詞・複合名詞のいずれにおいても、またA型、B型のいずれの型の語彙についても同じである。このことは、少なくとも調査を行った郡部の集落においては、伝統的なアクセント型からの逸脱が基本的に「A型とB型の混同」であったことを意味している。つまり、二型アクセントや音節方言(音節単位の音調付与)という従来の体系を守りながら、その体系内で個別語彙のアクセントが変化しているようなのである。

このA型⇔B型という混同がどのような語に起こっているかをみるために、表1-2に示した4つのアクセントグループに分けて若年層の誤答率を調べてみたのが表4である。

表4 若年層の誤答率 (%)

アクセントグループ \ 語句タイプ	基本名詞	複合名詞
起伏式・A型	7	7
平板式・A型	43	27
起伏式・B型	25	60
平板式・B型	11	4

エラーのほとんどが「平板式・A型」と「起伏式・B型」という特徴を持つ語彙に起こっていることがわかる。この変化は、基本名詞と複合名詞の両方において起こっている。アクセント変化が顕著な語彙を(5)-(8)に示す。(5)-(6)は基本名詞の例、(7)-(8)は複合名詞の例である（（ ）内は東京方言のアクセント型を表す）。

(5) A型⇒B型

かえで → かえで (かえで、楓)
 らくだ → らくだ (らくだ)
 おしょく → おしょく (おしょく、汚職)
 ブラジル → ブラジル (ブラジル)

(6) B型⇒A型

もみじ → もみじ (もみじ、紅葉)
 きょうと → きょうと (きょうと、京都)
 しょうたい → しょうたい (しょうたい、招待)
 ドーナツ → ドーナツ (ドーナツ)

(7) A型⇒B型

しゃかいとう → しゃかいとう (しゃかいとう、社会党)
 かごしまさん → かごしまさん (かごしまさん、鹿児島産)
 らくだいろ → らくだいろ (らくだいろ、らくだ色)

(8) B型⇒A型

あおしんごう → あおしんごう (あおしんごう、青信号)
 ゆうかいじけん → ゆうかいじけん (ゆうかいじけん、誘拐事件)
 かじばどろぼう → かじばどろぼう (かじばどろぼう、火事場泥棒)
 コーヒーゼリー → コーヒーゼリー (コーヒーゼリー)

鹿児島の新しい発音と東京方言の発音が同じでないことは一目瞭然であるが、下降調・非下降調という点に注目すると、両者のアクセント型は一致している。すなわち、東京方言で下降調アクセント（起伏式）で発音されている語彙は鹿児島でも下降調（A型）で発音されるようになり、一方、東京方言の非下降調アクセント（平板式）の語は鹿児島でも非下降調（B型）で発音されるようになってきている。

表4のデータは、鹿児島方言のアクセントが明らかに東京方言の影響によって変わってきていることを示している。この変化は和語、漢語、外来語という語種の違いを超えて、すべてのタイプの単語で起こっている。また、「もみじ」や「ドーナツ」をはじめとする(6)

のタイプの語では新アクセントが中年層にも見られることから、東京方言の影響は最近始まったわけではないことがうかがえる。(5)や(7)-(8)のタイプの語では中年層以上の話者にアクセント変化が顕著に見られないことと考え合わせると、鹿児島方言におけるアクセント変化の発端が(6)のような「起伏式・B型」というタイプの語における変化であったことが想像できる。

4. 調査の概要

4.1. 目的

前節では、鹿児島方言の若年層においてアクセント変化が顕著であり、その変化が東京方言の下降調・非下降調を模倣する形で起こっているという先行研究のデータを紹介した。東京方言の干渉によって起こったこのアクセント変化によって、鹿児島方言を特徴づけていた複合法則が崩れ、複合名詞が第一要素のアクセント型を継承しない事態が生じているように見える。(7)-(8)のデータはそのような複合語音韻規則の崩壊を強く示唆しているように見えるが、その一方で、これらの語例は既存の複合語であるために解釈があいまいになる点も否めない。つまり、「社会党」や「青信号」は既に語彙化された複合語である可能性も高いため、(7)-(8)は複合語というより(5)や(6)と同じ類の語例とみなすことが可能となる。この解釈に立てば、(7)や(8)のデータは必ずしも複合法則の崩壊を意味するものとは言えなくなるのである。

このあいまい性を解決するために、本稿では新造の複合語を調査語彙に用いて、複合法則が真に崩壊しつつあるのかどうかを確認することにした。新造複合語を用いることによって複合法則という複合語アクセント規則の崩壊を確認し、さらに詳細なデータを得るのが本稿で報告する調査の目的である。

4.2. 話者

調査は2006年9月と2007年1月に鹿児島県（薩摩川内市及び鹿児島市）で行った。調査に協力してくれた鹿児島方言話者は中高年層3名、若年層8名の合計11名である。中高年層の3名はいずれも薩摩川内市で生まれ育った男性話者である。一方若年層の8名は鹿児島大学の学生であり、県内の出身地は話者ごとに異なる¹。(9)に各インフォーマントの情報（調査時の年齢および性別）を記す。

(9) a. 中高年層

HY (71, 男)、NZ (50, 男)、NK (50, 男)

b. 若年層

HY (21, 女)、SH (21, 女)、MY (21, 女)、HR (21, 女)、MA (19, 女)、NA (21, 女)、HN (21, 女)、KS (24, 男)

4.3. 調査語彙

調査で用いた語彙は論文末の補遺に記載した50の語彙（形態素）に次の3つの語尾を加えて作った合計150語の人名である。

- (10) a. 女性の人名語尾「子」：金子、銀子、銅子、鉄子、馬子、花子…
- b. 男性の人名語尾「男」：金男、銀男、銅男、鉄男、馬男、花男…
- c. 男性の人名語尾「也」：金也、銀也、銅也、鉄也、馬也、花也…

これらの150の人名の中には、「花子」や「鉄男」「金也」のように実在するものも若干含まれるが、大半は「銅子」や「馬男」「花也」のように実在しそうにないもの——つまり新造の複合語——である。前部要素となる50語を音節構造から見ると、2つの軽音節(L)

からなるものが大半（50語中40語）を占め、「金、銀、銅」のように重音節（H）1つから成るものと、「羊、緑」のように軽音節（L）3つから成るものも若干含まれている。語種別では、「金、銀、銅、鉄、今日、象、和歌」の7つの漢語を除いて、すべて和語である。

アクセントから見ると、鹿児島方言の伝統的な話者が単独で発音した場合にA型となるものが25語、B型となるものが25語という内訳である。2節で述べた複合法則により、「子、男、也」のどの形態素が付いてもアクセント型は変わらず、「金」や「鼻」のようなA型形態素で始まる名前はA型で、「銅」や「花」のようなB型形態素で始まる名前はB型で発音されることが期待される。

- (11) A型：きんこ（金子）、きんお（金男）、きんや（金也）
 はなこ（鼻子）、はなお（鼻男）、はなや（鼻也）
 B型：どうこ（銅子）、どうお（銅男）、どうや（銅也）
 はなこ（花子）、はなお（花男）、はなや（花也）

一方、既に述べたように東京方言の複合語アクセントは後部要素によって決定される。人名語尾の場合、「子」と「也」は起伏式複合語(12)を作り出し、「男」は平板式複合語(13)を作り出す（秋永 2001、田中・窪菌 1999）。起伏式の場合、人名全体が3モーラの長さであれば音節構造に関わらず高低低(12a, b)となり、4モーラの長さ（つまり軽音節3つ＋子／也）の場合には低高高低(12c)となる。これに対し平板式となる「...男」の場合、語頭音節が重音節であれば(13a)のように語頭から高くなり、軽音節であれば(13b)のように2モーラ目から高くなる。

- (12) a. のぶこ（信子）、はなこ（花子）
 b. ゆうこ（裕子）、あいこ（愛子）
 c. さくらこ（桜子）、かおるこ（薫子）
- (13) a. こいお（鯉男）
 b. のぶお（信夫）、よしお（義男）

(11)の鹿児島方言アクセントと(12)―(13)の東京方言アクセントを対比すると、今回の調査で用いた150語の人名は次の4グループに大別できる。これは表2に対応する分類である。

表5 調査語彙における東京方言と鹿児島方言のアクセント対応

東京方言 鹿児島方言	起伏式アクセント	平板式アクセント
A型アクセント	鼻子、金子 (25語) 鼻也、金也 (25語)	鼻男、金男 (25語)
B型アクセント	花子、銅子 (25語) 花也、銅也 (25語)	花男、銅男 (25語)

4.4. 調査方法

調査方法は話者ごとの単語読み上げ方式である。補遺にあげた50個の前部要素をランダムに並べ、それらに「子」「男」「也」を付けて150の人名を作成した。また名前の前部要素をA型、B型のいずれで発音しているかを確認するために、同じ50個の前部要素に格助詞「が」を付けた句表現も用意した。人名は「りす子」「りす男」「りす也」を除いてすべて漢字で表記し、また誤読がないように、その読み（ひらがな）を括弧に入れて提示した。

調査に先立ち、話者には日常的に家族と話す方言で単語を読み上げるように指示した。調査において、各話者はまず「...子」の50語を読み上げた後に、「...男」の50語、「...也」の50語と読み進め、最後に「...が」の50句を読み上げた。読み上げ回数は1語につき1回であるが、迷った場合には納得がいくまで複数回発音するように促した。複数回発音した場合には、最後に発音したものを分析の対象とした。

4.5. アクセント型の正誤判断

アクセント型の正誤判断は、基本的に窪園 (2006a)と同じ基準を用いた。すなわち、前部要素を鹿児島方言の伝統的なアクセント型で発音しているかどうかは、「...が」の発音が基本的に平山輝男 (編) 『全国アクセント辞典』に記載されているアクセント型に従っているかどうかで判断した。たとえば、「金、銀」はA型、「銅」はB型と記載されているから、「金が」「銀が」はA型、「銅が」はB型で発音されることが予想される²。逆のアクセント型で発音された場合や、A型・B型以外のアクセント型で発音された場合には、誤答と判断した。

- (14) a. 金：きんが (正)、きんが (誤)、きんが (誤)
 b. 銅：どうが (正)、どうが (誤)、どうが (誤)

本稿が目指したのは、「...子」「...男」「...也」の複合表現において複合法則が守られているかどうかという点である。その話者が発音した前部要素のアクセント型と人名のアクセント型が一致している場合には正答とみなし、一致していない場合には誤答と判断した。たとえば「金」「銅」を伝統的なアクセント型（それぞれA型とB型）で発音した話者であれば、(15/16a)が正答と判断され、(15/16b)のようにA/B型を混同した発音や、(15/16c)のような東京方言の発音は誤答と判断される。

- (15) 金子、金男、金也
 a. 正答：きんこ、きんお、きんや
 b. 誤答：きんこ、きんお、きんや
 c. 誤答：きんこ、きんお、きんや

- (16) 銅子、銅男、銅也
 a. 正答：どうこ、どうお、どうや
 b. 誤答：どうこ、どうお、どうや
 c. 誤答：どうこ、どうお、どうや

一方、話者が伝統的な発音からはずれて、「金」と「銅」をそれぞれB型、A型で発音した場合には、その単独発音と一致する人名のアクセント型が複合法則を守っているものと判断された。

- (17) 金 (きん)、金が (きんが)
- a. 正答: きんこ、きんお、きんや
- b. 誤答: きんこ、きんお、きんや
- c. 誤答: きんこ、きんお、きんや
- (18) 銅 (どう)、銅が (どうが)
- a. 正答: どうこ、どうお、どうや
- b. 誤答: どうこ、どうお、どうや
- c. 誤答: どうこ、どうお、どうや

4.6. 予想と着眼点

人名の発音については、(i)複合法則に従って前部要素のアクセント型を継承するか、(ii)複合法則に違反してA型からB型へ、もしくはB型からA型へと、鹿児島方言の二型アクセント体系の中でアクセント型を変えるか、(iii)二型体系から逸脱して東京方言のアクセント型を模倣するか、以上の3つの可能性(仮説)が考えられる。前部要素が伝統的なアクセント型で発音されたと仮定して、この3つの仮説が予想するアクセント型を前部要素の音節構造別(補遺参照)に示すと次表のようになる(H=重音節(2モーラ)、L=軽音節(=1モーラ))³。

表6 3つの仮説と予想

前部要素 アクセント	前部要素 音節構造	語彙 (例)	(i) 複合法則 通り	(ii) 複合法則 に違反	(iii) 東京型
A型	H	金子	きんこ	きんこ	きんこ
		金男	きんお	きんお	きんお
		金也	きんや	きんや	きんや
	LL	鼻子	はなこ	はなこ	はなこ
		鼻男	はなお	はなお	はなお
		鼻也	はなや	はなや	はなや
	LLL	桜子	さくらこ	さくらこ	さくらこ
		桜男	さくらお	さくらお	さくらお
		桜也	さくらや	さくらや	さくらや
B型	H	銅子	どうこ	どうこ	どうこ
		銅男	どうお	どうお	どうお
		銅也	どうや	どうや	どうや
	LL	花子	はなこ	はなこ	はなこ
		花男	はなお	はなお	はなお
		花也	はなや	はなや	はなや
	LLL	緑子	みどりこ	みどりこ	みどりこ
		緑男	みどりお	みどりお	みどりお
		緑也	みどりや	みどりや	みどりや

ちなみに複合法則を保ちながら、音節単位ではなくモーラ単位でアクセントが決定された場合、A型のH構造（金子、金男、金也）が(19)のような発音となる。このうち「きんこ」と「きんや」は東京方言のアクセント型と一致するが、「きんお」は一致しない。また、音節からモーラに移行しただけであれば、他の部分は表2の(i)が予想するものと同一である。このように、鹿児島方言の二型アクセント体系の中で音節性が薄れた場合と、東京方言のアクセントとは明確に区別できる。

(19) きんこ、きんお、きんや

5. 調査結果と分析

5.1. 中高年層

中高年層の誤答率をまとめると表7のような結果となった。既に述べたように、「...が」は『全国アクセント辞典』に記載のアクセント型と一致するかどうかを見たものである。中年層の二人(NZとNK)がともに「和歌」をB型で発音したが、これを除くと「...が」の誤答は皆無である⁴。ここから、中高年層は前部要素の単独形について、伝統的なアクセントを守っていることがわかる。

表7 中高年層の誤答数（率）

話者	...が	...子	...男	...也
HY	0/50 (0%)	3/50 (6%)	3/50 (6%)	4/50 (8%)
NZ	1/50 (2%)	4/50 (8%)	2/50 (4%)	5/50 (10%)
NK	1/50 (2%)	3/50 (6%)	2/50 (4%)	3/50 (6%)
計	2/150 (2%)	9/150 (7%)	8/150 (5%)	12/150 (8%)

「...子」「...男」「...也」の人名（複合名詞）については、全体としては複合法則を忠実に守っており、表6の(i)のパターンが大半を占めている。中年話者にも高年話者にも複合法則に違反しているものが数例ずつ見られるが、そのいずれもが、二型体系内でのアクセント型の変化（A型からB型、あるいはB型からA型）であった⁵。内訳は次の通りである。

表8 中高年層の誤答パターン別誤答数

話者	...子		...男		...也	
	A→B	B→A	A→B	B→A	A→B	B→A
HY	1	2	1	2	1	3
NZ	1	3	1	1	1	4
NK	0	3	0	2	0	3
計	2	9	2	5	2	10

「...子」「...男」「...也」のいずれにおいても、B型からA型へ変化しているものが逆方向に変化しているものより多い。前部要素のアクセントはA型とB型がほぼ半数ずつであるから、3種類の名前のいずれにおいてもB型からA型へ変化する傾向が認められる。

東京方言の干渉があれば、「...子」と「...也」の場合にはB型からA型へ、「...男」の場合にはA型からB型への変化が予想されるところであった。「...子」と「...也」ではその予想と一致する変化傾向が見られるが、「...男」においても「...子」「...也」ほどではないがB型からA型への変化が優勢であることから、東京方言の干渉と言い切ることはできない。以下に、複数の話者に見られた誤答例を示す。いずれもB型をA型に変える誤答である。「今日子」は3名全員が誤った例であり、他は2名が誤ったものである。

(20) B型 → A型

今日子、箸子、^{しん}真子、真男、真也、箸也、青也

(20)には「真」で始まる名前がすべて登場するが、これは「真」を前部要素とする複合語のアクセント型に揺れがあることと関係しているように思われる。『全国アクセント辞典』では(21)のような分布になっている⁶。

(21) A型：真実

B型：真意、真価、真空、真剣、真摯、真理

5.2. 若年層

若年層話者8名のうち2名（男女1名ずつ）は、アクセント型もモーラ性も東京方言タイプ化していた。一人の話者（女性）の例をあげる。

(22) (A型)

金：きんこ、きんお、きんや

鼻：はなこ、はなお、はなや

桜：さくらこ、さくらお、さくらや

(B型)

銅：どうこ、どうお、どうや

花：はなこ、はなお、はなや

緑：みどりこ、みどりお、みどりや

2名の話者がこのように東京方言タイプのアクセント型を示した理由は定かではない。鹿児島方言アクセントと東京方言アクセントの区別がつかないのか、あるいは言語コードのスイッチがうまくできないのか、いくつか可能性が考えられるが、即断はできない。

上記2名を除く6名（全員女性）は、基本的に鹿児島方言の二型アクセントを保持しており、誤答のほぼすべてがA型からB型、あるいはB型からA型への変化であった。これらの話者は音節方言としての特性も保持しており、たとえば「銅子」は「どうこ」ではなく「どうこ」、「金男」は「きんお」や「きんお」ではなく「きんお」と発音している。6名の話者の誤答分布を示したのが次表である。どの話者も表6の(i)と(ii)の両パターンが混在している。

表9 若年層の誤答数 (%)

話者	...が	...子	...男	...也	計 (...子、男、也)
HY	3/50 (6%)	6/50 (12%)	21/50 (42%)	8/50 (16%)	35/150 (25%)
SH	3/50 (6%)	14/50 (28%)	8/50 (16%)	20/50 (40%)	42/150 (28%)
MY	4/50 (8%)	12/50 (24%)	13/50 (26%)	24/50 (48%)	49/150 (33%)
HR	8/50 (16%)	16/50 (32%)	15/50 (30%)	14/50 (28%)	45/150 (30%)
MA	19/50 (38%)	10/50 (20%)	27/50 (54%)	10/50 (20%)	47/150 (31%)
NA	25/50 (50%)	2/50 (4%)	38/50 (76%)	2/50 (4%)	42/150 (28%)
計	62/300 (21%)	60/300 (20%)	122/300 (41%)	78/300 (26%)	260/900 (29%)

前部要素の単独発音（あるいは「...が」形）の誤答率が話者によって大きく異なるのに比べ、複合語全体（表の右端コラム）の誤答率は話者間で大差はない（29%±4%）。平均29%

という複合法則違反率は、表7に示した中高年話者の違反率(7%)よりも格段に高く、先行研究(表3)の25%という数値に近い。

次に、各話者がどのような語について複合法則を守っていないかを見たのが表10である。この表から、「…子」と「…也」ではB型からA型への誤答が多く、「…男」では逆にA型からB型への誤答が多いことがわかる。一人の話者(MA)が「…男」について逆の数値を示しているが、これを除くと「…子」と「…也」はA型の発音が圧倒的に多く、「…男」はB型で発音されることが圧倒的に多い。6名の話者を総合すると、「…子」と「…也」のA型率はそれぞれ82%(246/300)と85%(256/300)、一方「…男」のA型率は33%(100/300)であり、その差は歴然としている。

表10 若年層の誤答パターン別誤答数(%)

話者	…子		…男		…也	
	A→B	B→A	A→B	B→A	A→B	B→A
HY	1/28 (4%)	5/22 (23%)	21/28 (75%)	0/22 (0%)	3/28 (11%)	5/22 (23%)
SH	1/26 (4%)	13/24 (54%)	8/26 (31%)	0/24 (0%)	0/26 (0%)	20/24 (83%)
MY	0/25 (0%)	12/25 (48%)	9/25 (36%)	4/25 (16%)	0/25 (0%)	24/25 (96%)
HR	2/27 (7%)	14/23 (61%)	12/27 (44%)	3/23 (13%)	4/27 (15%)	10/23 (43%)
MA	0/40 (0%)	10/10 (100%)	20/40 (50%)	7/10 (70%)	0/40 (0%)	10/50 (20%)
NA	0/48 (0%)	2/2 (100%)	38/48 (79%)	0/2 (0%)	0/48 (0%)	2/2 (100%)
計	4/194 (2%)	56/106 (53%)	108/194 (56%)	14/106 (13%)	7/194 (4%)	71/106 (67%)

この結果を、東京方言との対比に基づいてまとめてみたのが表11である。先述したように、東京方言では「…子」と「…也」は起伏式アクセントを作り、「…男」は平板式を作る。「平板式・A型」という複合語(たとえば「金男」「鼻男」)のB型化と、「起伏式・B型」という複合語(たとえば「銅子」「花男」)のA型化が顕著である。表11に見られる分布の偏りは先行研究が示した複合語データ(表4)とよく似ており、複合法則が若年層において守られなくなっていること、そしてその変化が東京方言の干渉によるものであることを如実に示している。また、A型化とB型化の比率はほぼ同じであることから、東京方言の影響はA型、B型いずれの複合語においても同様に観察されることがわかる。

表11 若年層の誤答率(%)

起伏式・A型	11/388 (3%)
平板式・A型	108/194 (56%)
起伏式・B型	127/212 (60%)
平板式・B型	14/106 (13%)

6. 結び

本稿では「銅子」「箸男」「飴也」のような新造複合語(人名)を題材として、鹿児島方言話者がどの程度、複合法則を保持しているか考察した。この結果、中高年層ではほぼ法則が忠実に守られている一方、若年層(20歳前後)の話者では約30%の割合で法則が破

られていることがわかった。誤答例を詳細に分析した結果、「…子」と「…也」はB型からA型へ、「…男」は逆にA型からB型へ変化しているという顕著な傾向が観察された。東京方言では「子」と「也」は起伏式アクセントを作る人名形態素、「男」は平板式を作る形態素であることから、窪菌 (2006a/b)の報告通り、鹿児島方言のアクセント変化は「平板式・A型」と「起伏式・B型」のタイプに偏っていることがわかる。よって、鹿児島方言のアクセント変化が東京方言の干渉によって起こっていることが確認できる。その一方で、音節を基本にアクセントを決めるという特徴は依然として守られている。この点においても先行研究の主張が確認できた。

「青信号」「社会党」のような既存の複合語だけでなく、「銅子」や「箸男」「飴也」のような新造複合語においても複合法則が機能しなくなっているということは、鹿児島方言を特徴づけていた複合語音韻規則が若年層において確実に失われてきているということの意味している。今後は、調査資料をさらに詳細に検討し、「平板式・A型」と「起伏式・B型」のタイプの中でもどのような語彙において変化が著しいか分析する必要がある。また、若年層話者の中に基本語彙のアクセント型や複合法則を保持している話者と保持していない話者が見られることから、両者を分ける要因が何なのかも今後検討しなくてはならない。

注

1. インフォーマントの出身地は次の通りである：HY (始良郡牧園町、鹿児島市下伊敷)、SH (始良郡加治木町)、MY (鹿児島市和田町)、HR (鹿児島市喜入町)、MA (始良郡始良町)、NA (始良郡始良町)、HN (鹿児島市谷山)、KS (鹿児島市中山町)

2. A型の1音節語は音節内の音調下降を伴い(金 きん、銀 ぎん)、B型の1音節語は音節全体が高く発音される(銅 どう)。

3. 東京方言では「桜男」と「緑男」は起伏式(さくらお、みどりお)に発音される可能性もあるが、本稿では「男」の平板化効果が生きるものと仮定して議論を進める。

4. ちなみに『全国アクセント辞典』には「和」はA型アクセントと記載されているが、「和」で始まる語彙はA型で発音されるもの(和食、和名、和装、和製、和平、和歌)とB型で発音されるもの(和睦、和歌山)がある。鹿児島方言話者(薩摩川内市出身)である筆者の内省では、「和」と「和食、和名、和装、和製、和睦」がB型、「和平、和歌、和歌山」がA型である。

5. 「りす子」や「はし子(橋子)」のような発音は音節単位の原則を破っているように見えるが、これは「す」や「し」の無声化母音によるものである。これらの例も含め、音節単位の音調を付与する原則は守られていた。

6. 筆者の内省では、「真価、真摯」はA型、「真実、真空、真剣」がB型であり、「真意、真理」は両者間で揺れる。人名の「真一」はA型である。

参考文献

- 秋永一枝 (2001) 「東京アクセントの習得法則」、金田一春彦 (監) 『新明解アクセント辞典』巻末。三省堂。
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店。
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界の指針社。
- 平山輝男 (編) (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版。
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版。
- 窪菌晴夫 (2006a) 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー)、岩波書店。
- 窪菌晴夫 (2006b) 「方言アクセントの変容」『日本語学』25-8: 6-17.
- Kubozono, H. (2007) Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. C. Gussenhoven & T. Riad (eds.) *Tones and Tunes: Studies in Word and Sentence Prosody*. Mouton de Gruyter.
- 坂口 至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』5-3: 33-41.

柴田 武 (1962) 「音韻」『方言学概説』、武蔵書房。

田中真一・窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室』くろしお出版。

上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』（日本語音声[2]）、三省堂。

補遺 アクセント（鹿児島方言）と音節構造に基づく前部要素の分類

ア型	音節構造	語数	語
A型	H	2	金、銀
	LL	2 1	鉄、鈴、牛、鳥、虫、りす、富、桐、竹、梅、杉、桃、和歌、夏、冬、赤、川、橋、飴、鼻、紙
	LLL	2	羊、桜
(小計)		2 5	
B型	H	5	銅、今日、真、蝶、象
	LL	1 9	若、熊、馬、松、栗、花、箸、春、秋、雨、神、青、白、黒、島、山、海、空、足
	LLL	1	緑
(小計)		2 5	

